

## 聖家族

2018.12.30

ルカ 2・41-52

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高神父

今日、わたしたちはこの一年の最後の主日を迎え、この一年わたしたちが担ってきた、そして一年のこの時期を迎えても依然として担って行かなければならない重荷の全てを、神にお委ねし、とにもかくにも、ここまで歩み続けることが出来たことを感謝し、迎える新たな年への神の祝福を願ってこのミサをおささげしています。そのようなわたしたちの思いの中で迎えるこの一年の最後の主日を、教会は毎年、聖家族の祝日として祝います。聖家族とはわたしたちが祝ったクリスマスに、わたしたちの中に来てくださった神の御子の中に入れてくださる家族です。

わたしたちは一人ひとり、それぞれの重荷を負っていますが、しかし、多くの場合その重荷の大半は、わたしたちがそれぞれの家族の一員であることによって負わされ、負って行かなければならない重荷ではないでしょうか。一年の終わりのこの主日に聖家族の祝日を祝い、聖家族を思うわたしたちは、わたしたちの家族の中に主がいてくださることを願わざるをえません。主がともにいてくださる、そのことが本当に信じられれば、家族のために負っている重荷を、わたしたちの中にもともにいてくださるそのお方に委ね、そのお方とともにわたしたちのこの重荷を負い通して行く力を見出すことが出来ることでしょう。「疲れた者、重荷を負う者はわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」と言われるお方は、わたしたちの家庭生活の只中にもともにいてくださる。わたしたちの心がそのことに気づくなら、全てをそのお方にお委ねしつつ、どうしても手のつけようもないと思われる、その重荷を負ってゆく新たな気力を奮い立たせることが出来ることでしょう。そのような恵みをお互いのために祈りつつ、一年の最後の今日の主日のミサ、聖家族の祝日のミサをともおささげしたいと思います。

この聖家族の祝日に毎年朗読される聖書の箇所は、普通わたしたちが家族ということばを聞いて想いかべる家族団らんの情景とは異なった、どこの家庭にもありうる緊張状態を語っています。このエピソードを語る聖書が意図していることは、イエスがそこでお育ちになった家族の歴史を語ることを主眼としているわけではありませんが、今日の福音に語られている出来事はヨセフとマリアとその子イエスによって構成される家族にとっても決して忘れることの出来ない、イエスの少年期の出来事であったに違いありません。今日の福音に語

られている一連の出来事の結びとして「母はこれらのことを全て心に納めていた」と述べられています。それは、神の御子の母としての聖母の信仰のありようを示す表現であると同時に、世の母親がわが子に対して共通に持つ、聖母のその子イエスに対する母心を示しているようにも思えます。

「聖家族の祝日」という今日の典礼の枠の中で、今朗読されたルカ福音書の箇所を味わうとするなら、わたしたちはそこからどのようなことを読み取ることが出来るのでしょうか。一見、わたしたちの家庭生活とは縁遠いように感じられる今日の福音は、わたしたちの家族の絆をあらためて考え直すヒントを与えているようにも思えます。

祭りのための巡礼の旅の帰り道、両親はイエスを見失います。過越しの祭りのための巡礼は、ガリラヤの田舎町に住む人々にとっては、一年に一度の晴れがましい大旅行です。親類縁者、町の顔なじみの皆が連れ立って、エルサレムの神殿への参詣に出かけるのです。このために一年間こつこつと働いてきたのです。聖なる祭りの期間の緊張が解けて、祭りの間、都で見聞きしたいろいろなことを楽しく語り合いながら帰路に着いたことでしょう。両親はてっきり、そんな人々の群れの中のどこかにイエスはおられると思っていたことでしょう。イエスはもう十二歳になっておられ、大人たちから離れて、自分たちの仲間同士で行動しても心配のない年頃です。そんな風にして、両親はイエスを見失います。都に向かう行きの道なら、こういうことは起こらなかったでしょう。家路をたどる帰り道の油断があったかもしれません。分かっているはずだ、どこかにいるはずだ、自分たちの親としての自信が覆される、親子の断絶の事実を知った時の親の驚きと苦悩を聖家族も経験したと言えば冒涇になるでしょうか。

今日の福音に語られている聖家族の姿は、家族として生きるとはどのようなことであるかをわたしたちに示し、そのことによって全ての家族の模範となっているのです。

ヨセフとマリアは必死になってイエスの行方を捜し歩きます。団体旅行の中で起こった我が家の不祥事です。皆が心配そうにしてはくれますが、そのことが一層、両親の心を追い詰めてゆきます。子供が側にいる時にはほとんど意識することもなかった、親であることの責任の重さ、親であることの切なさをマリアとヨセフも経験したのです。家族の絆とはこのようなものなのでしょう。

悲しいことに、普段当然のことと受け止めていた、家族としてともに生きることの、ともすれば見過しがちな、与えられている大きな恵みに、このようなことが起こると今さらながらに気づかされるのです。ヨセフもマリアもそのような事態を経験させられたのです。

三日目になってやっとイエスを探し当てた両親は、そこにいるイエスの姿に仰天したに違いありません。子供だ子供だとばかり思っていたわが子が、いつ

の間にか自分たちの手の届かないところに立っている。自分たちには近寄り  
たい都の大人たちに交じって、堂々と渡り合っているわが子を見出した時のマ  
リアとヨセフの驚きと、誇りがましい思いと、一抹の淋しさを、親であるなら  
誰でも経験するに違いありません。

「何故こんなことをしてくれたのです」。母のそのことばに応えてイエスが言  
われたことばに、両親は目を剥いたことでしょう。この子は自分たちに理解で  
きないことをしゃべっている。もう自分たちには理解できない世界に生きはじ  
めている。その時になってマリアは、その子を授かる前に天使から告げられて  
いたことを改めて思い出したに違いありません。ベツレヘムの馬屋でその子が  
産まれた時のことを、あらためて思い起こしていたに違いありません。そして、  
自分がそのような子供の母親であったことに改めて気づかされたことでしょう。  
家族の生活とはそのようなものではないかと思えます。その子を授かった時の  
感動は、長い長い家族の生活の中で日常の中に埋もれてしまいます。そのよう  
な日常の中で、自分たちに与えられていたお互いのかげがえのなさを再発見す  
るためには、それがどのように辛いものであっても、このような出来事が必要  
なのでしょう。こうして、家族の中の新しい関係が生まれてゆくことになるの  
です。

ナザレに帰ったイエスは、前と何も変わったところがないように、両親とと  
もに生活しています。けれども、聖家族の生活は、あのエルサレムでの出来事  
があった日以来、平穏な日常の親子の生活の中に静かな緊張関係を生み出した  
に違いありません。この子はやがて自分たちのもとから、この子が生きる、神  
が用意しておられる広い世界に旅立って行くのだ。何も変わったところのない  
普段の家族の生活の中で、両親の心のうちにはあの日以来、その覚悟がしっか  
りと刻み込まれたことでしょう。

クリスマスの夜、ヨセフとマリアの子として生まれたあの子がどのように成  
長していかれたか、その家庭環境はどのようなものであったか、聖書は多くを  
語っていません。そのような家族の生活をことさらに「聖家族の祝日」として  
祝うためには、わたしたちに与えられている情報は少なすぎるように思えるか  
もしれません。けれども、今日の聖書がわたしたちに示す聖家族の姿は、わた  
したちが生きるそれぞれの家族の生活を、神が与えてくださった恵みであり、  
それぞれに与えられた使命であると、改めて受け入れてゆくための十分な示唆  
を与えていると思えます。家族としてともに生きた、二度と戻っては来ない、  
この一年のそれぞれの家族の間に起こった出来事を、聖母がそうされたように、  
深く深く心のうちに納めて、この一年の終わりの今日の感謝のミサをともにお  
ささげいたしましょう。